

Title	江戸初期における絵巻制作の一背景：中井正知・杉原盛安の文化活動
Sub Title	A background of picture scroll production in the early Edo period: cultural activities of Masatomo Nakai and Seian Sugihara
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2008
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.95, (2008. 12) ,p.302- 318
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩松研吉郎教授高宮利行教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0302">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00950001-0302</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 江戸初期における絵巻制作の一背景

——中井正知・杉原盛安の文化活動——

恋田 知子

## 一 はじめに

古くは奈良時代に、釈迦の一代記である『過去現在因果経』をもとにした『絵因果経』がその淵源とも想定されるように、物語を絵画によって表現しようとする絵巻文化は、長きにわたって我々日本人の心をとらえてきた。平安時代以降には、『源氏物語絵巻』や『信貴山縁起絵巻』、『伴大納言絵詞』など、数々の優れた作品が制作された一方、寺社縁起や高僧伝なども盛んに絵巻化され、より多彩な展開を見せるにいたる。とりわけ室町期においては、享受者層の広がりとともに、それまでの宮廷絵師などによるものとは異なる、新しい題材や特異な画風のお伽草子絵巻が制作されるようになる。もちろん、貴顕による絵巻の制作・書写も引き続きおこなわれており、近年ではとくに、伏見宮貞成親王のような皇族や足利將軍家によって、いわば文化戦略の一手段として、絵巻が盛んに書写され、所蔵されていたものとの評価もなされている。<sup>1)</sup>

一方、江戸時代になると、それまでの狩野派や土佐派といった貴顕の御用絵師のみならず、俵屋宗達や岩佐又兵衛の

ような新たな絵師の出現にともない、古典への憧憬、復興の風潮とあいまって、豪華絢爛で独創的な絵巻が次々と生み出されていく。とりわけ美術史学においては、必然的にそうした絵巻群に注目が集まり、実質的には江戸前期に多くが制作されているお伽草子の絵巻を除けば、名もない絵師による新作や類型的な僧伝や縁起などの絵巻についてはあまり注意が払われておらず、国文学において、かろうじて仮名草子作者のかかわりなどが指摘されるに過ぎなかった<sup>2)</sup>。そうした意味では、いわば中世と近世の端境期にあたる江戸初期は、絵巻研究史における空白期ととらえられるのかもしれない。しかしながら、江戸初期に新たに制作された絵巻について詳細に検討してみると、制作要請や所持といった点において、前代とは異なる階層も浮かび上がってくるのであり、絵巻研究に新たな可能性を見いださうるものと考ええる。実際、江戸初期における物語草子のなかには、たとえば天理図書館蔵『魚太平記』の奥書に見られる尾張藩医小宮山道休<sup>3)</sup>のように、前代とは異なる層の関与が認められるのである。

そこで本稿では、これまでその文化活動という面においてはほとんど顧みられることのなかった、中井正知（一六三一—一七一五）と杉原盛安（？—一六四九？）という二人の人物に焦点を当てることによって、江戸初期における絵巻制作の実態とその背景について、少しく考察を試みてみたい。

## 二 大工頭中井正知とその文化ネットワーク

中井正知は、禁裏や城郭をはじめ、幕府の負担による寺社の新築造営・修復工事を担当し、建物の設計と施工をおこなっていたことで知られる京大工頭中井家の第三代である。大和法隆寺大工の出身で、徳川家康から京大工頭として畿内・近江六カ国の大工支配を命ぜられた中井家初代正清の甥にあたり、第二代正侶の養子となった人物である。中井家

については、幕末にいたるまで京大工頭の家職を歴代世襲したことから、これまで主に近世建築史において重視されてきた<sup>(2)</sup>。先行研究によれば、正保四（一六四七）年に大工頭に就いた正知は、禁裏の火災が相次いだことから、承応、寛文、延宝と三度にわたる御所の造営を担当する一方、石清水八幡宮や知恩院、泉涌寺など、戦国時代に失われた洛中洛外の寺社の復興にも従事していたことが知られている。万治二（一六五九）年の江戸城本丸造営の際には主水正に改め、宝永七（一七一〇）年に養子の内之助に家督を譲った後は、隠居して浄覚と改名したという。北山鹿苑寺の住持で公家出身の鳳林承章の日記『隔莫記』には、正知は「大工の主水」として書き留められており、その職務からも宮中や貴族との交流のほどをうかがわせる人物である。そんな正知が、ある絵巻の制作に奔走していたことは意外に知られていない。天和三（一六八三）年に、天台真盛宗の開祖真盛（一四四三—九五）の伝記で、『西教寺中興真盛上人伝』と題される絵巻が制作された。現在、上京に位置する天台真盛宗の西方尼寺に蔵され、宗祖の伝記五巻に、跋文一卷、『西方寺縁起』一卷を付すことから、『西方尼寺伝』と通称される絵巻である（以下、『西方尼寺伝』<sup>(3)</sup>）。その跋文には、次のように記されている。

右真盛上人絵縁起五巻は、西方寺の信久比丘尼携来て云、此数巻は寛文中、五條亞相為庸卿、西教寺の縁起を以て畫工に仰て書寫せしめ、則智玉比丘尼に付与せられし後、詞書をいれむとして終に志を遂す化せり。信久尼其宿志をみてむとすれとも、無縁にして年月旋轉たり。正知亦是を思てやます。然ゆへは、悲母在世此寺に皈依して、平素供佛施僧を勤修し、ひたすら寺門の昌盛綿邈ならむ事を祈らるゝ日尚し、且は彼亡母の冥福善縁のため、且は在世慈恩報謝の志願あり。于時天和元年冬十月適 楊明公槐門下に侍し日緯時 台聽に達し、忝 御家門伺候の卿

相君子、旨を仰て其詞書不日にして成ぬ。剩外題は 家熙公貴筆をそめらる。彼云此云永代彼寺門の榮達何事か是に過むや。且後證のため其来由をして卷末の楮尾をけかしたてまつらしむる者也矣。天和三年九月廿九日 従五位下主水正橋正知<sup>6</sup>

この跋文の最後に見える「従五位下主水正橋正知」こそ、先の京大工頭中井正知その人なのである。

『西方尼寺伝』は、跋文の内容から二段階の制作過程を経てなったものであることがわかる。すなわち、第一段階としては、寛文年中に五條為庸が西教寺の縁起に基づき、画工に絵を描かせ、それを西方尼寺の智玉尼に与えたものの、詞書を加える前に尼僧が亡くなってしまい、頓挫したというものである。これについては、まず為庸が画工に写させたものとなった「西教寺の縁起」とは何かということが問題となる。そもそも真盛伝のおおもととなっているのは、真盛の入滅直後、弟子によって編まれた『真盛上人往生伝記』三卷（以下、『往生伝記』<sup>7</sup>）である。真盛の中陰中に、弟子の真生が臨終と葬送の様子から生涯の出来事を書き記し、書簡を収録したものであるが、編年体の伝記は下巻のみであり、上・中巻にわたって入滅直後の様子を記し、往生伝の形式をとっている点に特徴がある。原本は散逸したものの、真盛三十三回忌にあたる大永六（一五二六）年に、弟子の盛音が書写した古本が西教寺に現存している。一方、十六世紀前期頃、盛音の弟子にあたる盛俊（？）一五五六。伊勢山田の善光寺開基）によってなされた『真盛上人絵伝記』六卷（以下、『絵伝記』）があり、幼少期から入滅、往生の奇瑞までを四十八願に擬して四十八段とし、漢文体の『往生伝記』によりながら絵を主とした和文で記された絵巻となっている。原本は明治期に焼失したものの、慶安二（一六四九）年の転写本が武生の引接寺に伝存しており、また少し遅れて書写されたものが西教寺にも伝存する。『西方尼寺伝』の挿絵は、

『絵伝記』 原本の転写本である引接寺蔵本に比して、西教寺蔵本の挿絵の構図に一致することから、「西教寺の縁起」とはおそらく西教寺蔵『絵伝記』を指したものである可能性が高い。為庸については、西教寺、西方尼寺のそれぞれのかかわりは現在のところ不明である。ただし、先にふれた『隔窆記』の寛永一七（一六三三）年七月一六日条の記事によれば、鳳林のもとを毎年訪れる四人の老婦人のうち、西方尼寺の真盛豆を持参する清甫なる尼が、『隔窆記』研究では西方尼寺の尼僧とみなされており、『隔窆記』の同時期の記事に五條為庸の来訪が散見されることなどから、鳳林を介して西方尼寺の尼と為庸が交流していた可能性も想定されるだろう。

そして第二段階として、絵のみ伝わっていた真盛上人伝に詞書を付そうと尽力したのが、『西方尼寺伝』の施主となつた中井正知なのである。跋文によれば、西方尼寺の信久尼に依頼された正知は、亡き母が西方尼寺に帰依していたことなどから本絵巻の制作に尽力し、近衛家熙を中心とした貴族に、詞書の書写を依頼、天和三（一六八三）年に絵巻として完成するにいたつたのである。実際、箱裏書きには、

一 真盛上人伝詞書筆者 願主信久尼 卷第一 万里小路中納言淳房卿 卷第二 竹屋右衛門佐光忠朝臣 卷第三  
平松少納言時方朝臣 卷第四 石井少納言行豊朝臣 卷第五 竹内三位惟庸卿 西方寺縁起 萩原左衛門佐員従朝  
臣 外題御筆 家熙公 跋一卷筆記無禪 天和三癸亥年九月二十九日 施主 橋正知

とある他、各巻末にも家熙の家司たちの名が明記されており、当代の能書家や有職故実家によって書写されたものであることがわかる。西方尼寺の尼僧と正知とのかかわりについても、『隔窆記』寛文二（一六六二）年二月二日条に、「大

工之主水來、金閣之圖見之、北野能易爲案内者、被來也」とあり、正知が北野の目代を通じて鳳林のもとを訪れていることから、西方尼寺の位置する北野の周辺における交流があったかと推察される。

また、家熙とのかかわりについては、絵巻制作以後の記事ではあるが、家熙の回顧録『槐記』の享保二二（一七二七）年十月一五日条に、次のように記されている。

○中井主水定寛ガ、常修院殿エノ咄シニ、昔シ加藤越中守ハ武威ノ天下ニカクレナキ者ナリシガ、茶ノ湯ノ沙汰ハサマデ聞ザリシガ、或時所望ニテ、金森宗和ヘ參ラレシガ、甚ダ唱嘆ニテ、宗和ノ茶ハ名人ト謂ツベシ。我所望セシハ、全ク茶ノ儀ニアラズ、其氣ノヒツバル所ヲ見ント欲シテ也。チヨツト炭取ヲ持テ出ラレシヨリ、一札ヲ述ケルマデニ、スキアラバ鍮ヲ入ベシトネライシガ、氣ノ満タル處、一毛ノスキマモナクテ、終ニ鍮ヲ得入レズト語ラレシガ、誠ニ御上手也ト承リ及ビヌト申タリケレバ、常修院殿、サコソアルベケレトテ、大イニ嬉リカリ也。<sup>10</sup>

この他『槐記』には、引退後「常寛」と改名したとされる正知についての記事が散見されることから、その交流のほどがうかがい知れるだろう。

以上のように、従来、京大工頭という職掌によつてのみ評価されてきた正知ではあるが、『西方尼寺伝』の存在から、いわば彼を中心とした文化ネットワークによる絵巻制作の実態が見えてくるのである。建築界の活況が寛永期に頂点を迎えた後は幕府により入札制度が導入されたことで、中井家は財政破綻の一途をたどることとなる。本絵巻が制作された天和三（一六八三）年は、そのような中井家の財政に陰りが見えはじめた時期と考えられることから、おそらくそれ

は財力にものをいわして作らせたようなものでは決してなく、これまで培ってきた彼の人的ネットワークによる成果であったと位置づけられるのではないだろうか。

### 三 「幻の源氏物語絵巻」と杉原盛安

『源氏物語』千年紀にあたる本年、「幻の源氏物語絵巻」と称され、話題となつてゐるものに、十七世紀中頃に制作された『源氏物語絵巻』がある。<sup>(1)</sup>従来、その一部として、石山寺蔵の「末摘花」上巻、スペンサー・コレクション蔵「末摘花」中・下巻および「帚木」一巻、バーク財団蔵「賢木」断簡、京都国立博物館寄託「葵」六巻の存在が知られていたが、それらに加え、バーク蔵本の連れである個人（ベルギー）蔵「賢木」断簡、および徳川美術館寄託「桐壺」三巻（個人蔵）が新たに紹介されたことで、にわかに注目を集めている。これら『源氏物語絵巻』が、もし五十四帖にわたつて制作されていたならば、我が国の絵巻物史上、類を見ないほどの大規模な絵巻制作であつたと想定されることから、後水尾院とその周辺の九条家を中心とする公家衆によるものではないかとの推測もなされている。<sup>(2)</sup>

しかしながら、この「幻の源氏物語絵巻」に關与した杉原盛安については、詳しい来歴など不明であることから、これまであまり注意を払われずにきた。稿者はかつて、別の絵巻についての検討過程において、この盛安に注目し、『源氏物語絵巻』に付された印記の存在から考察をおこなつた。<sup>(3)</sup>すなわち、先にあげた「幻の源氏物語絵巻」の伝存本のうち、石山寺蔵「末摘花」上巻、スペンサーの「末摘花」中・下巻および「帚木」一巻に確認される「盛安」の朱文円印、および「杉原／出雲」の単辺方形印の存在である。杉原盛安の名は、管見の限り、人名辞典や系図の類には見いだせず、「盛安」、「杉原出雲」の印記についても従来不明とされてきた。『姓氏家系大辞典』によると、桓武平氏の流れを汲む杉



原氏は、各地に多くの子孫を残しているが、『雲州軍話』に「永祿九年云々、杉原播磨守盛重は美保関取出の付城を構ふ」とあることなどから、印記に見られる「杉原出雲」も杉原氏の受領地を示したものと判断される。「幻の源氏物語絵巻」にもその印記が付されるのみで盛安の詳細については記されていないものの、大規模な源氏物語絵巻制作に関与していたことは間違いない、江戸初期における絵巻制作を考察する上でも見過ごせない人物なのである。なぜなら、盛安は先の中井正知同様、自ら施主となり、絢爛豪華な絵巻二軸の制作・奉納をもおこなっていた人物なのである。それが、慶安二（一六四九）年に北野の廻向院に奉納され、現在、岩瀬文庫に伝存する『釈迦并観音縁起』絵巻（以下、岩瀬本）である。

岩瀬本は、日本撰述の偽経と推察される『観世音菩薩往生浄土本縁経』（以下、『本縁経』）を和文化化した絵巻である。『本縁経』は、王舎城鷲峰山頂の釈迦の会座において、観世音菩薩が惣持自在菩薩に対して、極楽世界の往生浄土の因縁を明らかにするもので、その因縁として「早離速離」の兄弟の悲話が語られる。幼くして実母と死別した兄弟が継母によって孤島に捨てられ、死後、観音・勢至となるという「早離速離」譚については、早く岡見正雄氏により、中世の唱導世界において享受され、お伽草子『月日の本地』などの本地物にも多大な影響を与えた説話として位置づけられている。岩瀬本についても、そのような「早離速離」説話の物語草子化という把握が出来るのだが、その一方、釈迦の説法にはじまり「早離速離」譚や讚偈にいたるまで、『本縁経』全文をそのまま和文化化したものであることから、縁起絵巻としての制作意図も考えられる。きわめて豪華な装丁で仕立てられた岩瀬本には、『本縁経』の内容にそった形で上下巻あわせて十四図の挿絵が付されており、非常に精緻なものとなっている。岩瀬本の跋文には、そのような絵巻を制作した意図が次のように記されている。

寛永之比、我蒙不思議之靈夢。始而奉拜此兩尊者、坐長二寸七分横一寸七分、圓木之中、奉開見。一方者釈迦之像（前有阿難／迦葉二尊者）、一方者觀音之像（前有惣持／自在菩薩）。以梅檀刻其尊容、頗可為佛作者歟。且亦二尊之相好、偏相叶觀世音本緣經之說。依之以此經、為和訓加盈圖、則奉為緣起、花洛北野廻向院令寄進者也。誠如說一切之衆生、現世者福智願望速令満足、未來者往生淨土必不可無疑者也。慶安第二戊子姑洗中瀨 施主平盛安（杉原／出雲）  
单辺方形墨印）

すなわち、釈迦と觀音の像にかかわる靈夢を蒙り、それらが『本緣經』の説く様に通じることから、同經を和文化して絵を付置した緣起を制作し、北野の廻向院に寄進したとあるのであり、その制作發願者として平（杉原）盛安の名が記されているのである。さらに上巻の末尾には、別筆で以下のような記事が付されている。

我昔依宿習之芳縁、得端正微妙之靈像。伏拜其儀式、宛合往生淨土本緣之說。誠權化之所作、凡鄙豈可窺之乎。爰有俗士。名相原氏盛安。依此靈像、蒙不思議之瑞夢。最信仰之運十餘年之思、以和字書本經、加図模様起、欲令男女貴賤早解本經之素意而已。可謂出離生死之靈寶、往生刹土之龜鑑者也矣。慶安二（戊／子）年仲春吉辰

この書写者は、昔「端正微妙之靈像」を得たとしており、その「靈像」によつて、俗士「相原氏盛安」が瑞夢を蒙つたとしてゐることから、おそらく奉納先の廻向院の僧が書き加えたものと判断されるのである。

北野廻向院は、現在の東京区東堅町に位置し、阿弥陀仏を本尊とする浄土宗の寺院である。残念ながら、本尊の阿弥陀をふくめ、寺宝や古記録類は現存されておらず、奉納の後、岩瀬文庫に蔵されるにいたるまで、本絵巻がどのような伝来を遂げたのか、その詳細は不明といわざるを得ない。しかしながら、『京都坊目誌』の廻向院の箇所には、寛永五（一六一八）年に海中より発見されたという如意輪観音の伝承が記されており、先の跋文の「寛永の比」に夢を見たとする記事との呼応が確認できる。さらに、寛文八（一六六八）年刊の『山城国中浄家寺鑑』にも、この海中出現の如意輪観音像に関する記事が見える上、海中出現の像とは別に立項された「赤梅檀を以て比首羯摩の作」とする「如意輪音大士の尊像」について「縁起」があり、「参詣して拝み奉り此來歴をも聞給ふべき者也」と記す<sup>(5)</sup>。海中出現の如意輪観音を指したものであるのか判断としないものの、いずれにせよ、十七世紀半ばの廻向院に、観音像に対する「縁起」のあつたことが記されている点で非常に興味深い。実際、絵巻が奉納された当時の廻向院には、本尊の阿弥陀とは別に如意輪観音像が安置され、人々の信仰を集めていたのであり、おそらく寛永五年の観音出現という奇瑞こそが、縁起絵巻制作の直接のきっかけとなつたものと考えられる。そこには単なる經典の和文化にとどまらない、江戸初期における縁起絵巻の制作状況が示されている。おそらく寛永の海中出現を契機に、廻向院の如意輪観音像に対する人々の信仰が高まり、それにともない観音を語る縁起が求められたのであろう。そのような絵巻化に直接かかわつた人物が、杉原盛安なのであつた。

岩瀬本の上下巻末には、先のスペンサー蔵「帚木」一卷に見られるのと同じ「杉原出雲」の単辺方形印が付されている。さらに京都国立博物館寄託「葵」六巻には奥書や印記はないものの、七宝花文の銅製の軸が用いられており、岩瀬本のそれと酷似している。同様な軸は石山寺蔵本にも確認でき、これら一連の『源氏物語絵巻』と岩瀬本との制作上の

関連をうかがわせる。実際に制作・奉納をおこなった岩瀬本の事例から、「幻の源氏物語絵巻」制作においても、盛安の関与や役割のほどをより重視し、検討すべきものがあるだろう。

絵巻を制作・奉納した盛安と奉納先の廻向院とのかかわりについては、残念ながら古記録類も伝存していないことから、現在のところ詳らかでない。ただし、廻向院の境内には、江戸中期の絵師として知られる長沢芦雪や、刀剣彫刻の工匠一宮長常などの墓所があり、工芸関係者とのかかわりが深い寺院であったことが推察される。あるいは盛安についても、そのような関連から、『本縁経』を絵巻として制作・奉納するにいたったものかとも推測される。なぜなら、盛安は『名劔秘傳書』なる刀劔についての秘傳書をも書写していたのである。

#### 四 杉原盛安とその文化営為

東京国立博物館に蔵される『名劔秘傳書』は、源義家が八幡宮參籠の際に摩利支天より授かった、刀の善悪を見分ける秘傳の書である。その奥書には、

寛永七庚午曆九月十一日、高橋新五左衛門尉、右相傳之一卷令書留者也。明曆元乙未九月廿八日 平盛安（盛安）  
（円印）進上<sup>⑧</sup>

とあり、寛永七（一六三〇）年に高橋新五左衛門尉が相伝した書を、明暦元年（一六五五）に平盛安が写したとする。秘傳書という本書の性格からすると、書写者である盛安もまた、刀劔にかかわる者であった可能性が考えられよう。ま

た、寛文元年（一六六一）写の『日本書紀目録』の奥書にも、

于時寛文元辛丑年立冬之日（杉原出雲）平盛安<sup>(17)</sup>

とあり、「杉原出雲」および「平盛安」の名が見いだせるのである。岩瀬本の制作・奉納をおこなった盛安には、書写者・故実家たる側面がうかがえる。現在のところ、管見に入った盛安による書写本は、この二書のみであるが、先の『名剣秘傳書』末尾に付された「盛安」の円印は、石山寺、およびスペインサー蔵「末摘花」巻末のそれと同一のものである。『源氏物語絵巻』の詞書の書写者は四辻季賢など同時代の堂上貴族であり、岩瀬本が豪華かつ精緻な仕立てであるのに加え、軸の共通性をも考え合わせるならば、岩瀬本の制作発願者にして、『名剣秘傳書』や『日本書紀目録』をも書写していた杉原盛安は、江戸初期の絵巻制作における、いわばプロデューサー的な存在として位置づけられるのではないか。

さらに興味深いことに、江戸初期の絵巻の発願・制作に携わった杉原盛安は、その印記の存在から、典籍蒐集家としての顔ものぞかせる。たとえば、先の「盛安」の円印については、擦消されて判読しにくいものの、国会図書館蔵『聖徳太子伝』（寛什本。十冊）の各冊一丁目表の右下に確認することができる<sup>(18)</sup>。本書は、江戸前期に寄合書されたものと判断され、おそらく蔵書印として用いられた可能性が高い。

これに加え、宮内庁書陵部に蔵される二種の書物に盛安の印記が確認されるのである。一つは、室町末期写とされる『二十一代集』（桂宮本）である<sup>(19)</sup>。金泥・金箔を豊富に使った華麗な料紙で仕立て上げられた本書は、黒色漆に花草を配した金蒔絵を施す外箱、および重ね箱に収められており、嫁入り本としての様相を呈している。その全四八冊の各帖末

尾左下に、「杉原／出雲」の单边方形朱印と「盛安」の鼎形朱印が認められるのである。前者の印記については、岩瀬本、およびスペインサー蔵「帚木」巻末のそれと同一のものと判断される。本書には、全冊を通しての伝来をあらわす奥書、識語の類は付されておらず、盛安による制作の可能性も全くないわけではないが、室町末期の写しと推察される状態を勘案すると、やはり盛安の蔵書印として考えるのが妥当であろう。『二十一代集』としては、現存最古の伝本群に属すものとみなされる、豪華な装丁の本書を所持していた点で、盛安の教養や財力、交流圏を推測させるものがある。

さらにもう一つ、盛安の印記が確認されるのが、天和二（一六八二）年写『文明歌合』（鷹司本）である。本書における歌合とは、文明一四（一四八二）年六月一〇日に、九代將軍足利義尚が主催した百番歌合であり、義尚家主催の歌合の中で最も規模の大きいものとして知られている。現在、二七種の伝本が判明しており、書陵部に三種蔵されるうちの一本である。本書には、判者である飛鳥井雅親の後記が付され、末尾に別筆で、

天和二年端月十四日／以堯憲自筆本令校合畢

との奥書が記されており、明応二（一四九三）年に『和歌深秘抄』を著した堯憲の自筆本があったことを伝えている。この奥書の左下末尾に、「平杉原／出雲守」の单边方形朱印が付されており、さらに二丁目表右下には、石山寺蔵本など同一の「盛安」の朱円印が確認されるのである。現在のところ、盛安について最初に確認できる書写奥書が、岩瀬本の慶安二（一六四九）年であることからすると、天和年間は盛安存命期にあたるものと判断されるが、堯憲自筆本と校合したとする奥書の筆を見る限りでは同筆とは言い難く、これもやはり蔵書印とみるべきであろう。

加えてこのたび、三重県立図書館蔵『古今集積義』<sup>22</sup>、および中川博夫氏蔵『山家集』<sup>23</sup>にも、「盛安」の朱円印が確認されることが判明した。三重県立図書館蔵『古今集積義』は、荷田春満の弟子として知られる山名政胤を輩出し、三重県最古の寺子屋の師匠であり、藤堂家ゆかりの神社を管理していた家柄である山名家蔵書のひとつである。一条兼良著『古今集積義』の江戸前期の写しと目され、奥書から藤原資直書写本の転写本であることがわかり、東山御文庫に親本の資直筆『古今集積義』が伝わる。本書の一丁表に書陵部蔵『二十一代集』と同一の「盛安」の鼎型朱印、一丁裏に石山寺蔵本など同一の「盛安」の朱円印、十八丁裏に書陵部蔵『文明歌合』と同一の「平杉原／出雲守」の单边方形朱印の三顆の盛安印が確認できるのである。同じく、中川博夫氏蔵『山家集』にも、先の「盛安」の朱円印（二丁裏）、および「平杉原／出雲守」の单边方形朱印（奥書右下）に認められる。いずれも江戸前期の写しと推察される『古今集積義』、『山家集』に捺された盛安印もやはり蔵書印とみるべきであろう。

先の書陵部蔵『二十一代集』『文明歌合』に加え、『古今集積義』や『山家集』など歌書の類にも、盛安の蔵書印が見いだせることが判明した。これら歌書類を蒐集した背景には、おそらく絵巻制作などにかかわって、堂上貴族と交流するなかで和歌の教養が求められたことによるものと考えられよう。物語絵巻や縁起絵巻のみならず、盛安の歌書への関心をも示す事例であり、これまで知られていた「盛安」の円印や「杉原出雲」の单边方形印に加え、新たに判明した印記もふくめ、蒐集家としての側面については、今後とも追究すべき問題といえる。

## 五 小括

以上のように、中井正知と杉原盛安という、これまでの日本文学史においてはほとんど注目されることのなかった二

人の人物を取りあげ、彼らが中心となつて制作した絵巻を例に、近世初期における絵巻制作の一背景について考察した。いずれも江戸初期の公家文化圏との密接なかわりのほどがうかがえ、自らの人的ネットワークを活かしながら、絵巻制作に尽力していた様相が浮かび上がってきたといえよう。困窮の一端をたどる公家に代わつて、時には料紙や軸などをも調達し、絵巻制作における人頭指揮を執つていたと推測される彼らの姿には、貴顕のような前代の絵巻制作者層とは異なる、いわば名もない人々による文化活動がその後の近世文芸を花開かせていくという、新たな時代の文芸文化の萌芽を見てとれるのかもしれない。

注

- (1) 高岸輝氏「室町殿絵巻コレクションの形成」(『室町王権と絵画―初期土佐派研究』京都大学学術出版会 二〇〇四) など参照。
- (2) 石川透氏「浅井了意筆奈良絵本・絵巻類」(『奈良絵本・絵巻の生成』三弥井書店 二〇〇三) など参照。
- (3) 大谷大学文学史研究会編『魚太平記 校本と研究』(勉誠出版 一九九五) など参照。
- (4) 城戸久氏編『中井家系譜』(私家版 一九五一)、高橋正彦氏『大工頭中井家文書』(慶應通信 一九八三)、谷直樹氏『中井家大工支配の研究』(思文閣出版 一九九二)、同氏『大工頭中井正知と近世京都の復興』(『寛永文化のネットワーク―『隔黄記』の世界』思文閣出版 一九九八) など参照。
- (5) 本絵巻の特徴や意義については、拙稿「尼寺と絵巻―真盛上人伝の二型―」(『説話文学研究』四三 二〇〇八・七) において検討した。
- (6) 『西方尼寺伝』については現在非公開のため、西教寺蔵の写真によつて分析を試み、以下の本文等の引用もこれにより私に翻字した。



- (7) 天台真盛宗学研究所編『訳註 真盛上人往生伝記』(三重県郷土資料刊行会 一九七二) 参照。
- (8) 八耳哲雄氏『無欲の聖 真盛上人』(星林社 二〇〇七) 参照。
- (9) 岡佳子氏「鳳林承章と『隔婁記』」(『寛永文化のネットワーカー—『隔婁記』の世界』思文閣出版 一九九八)、『隔婁記』研究会編『隔婁記総索引』(思文閣出版 二〇〇六) など参照。
- (10) 緑川明憲氏の御教示による。山科道安編『槐記』(日本古典文学大系『近世随想集』岩波書店) など参照。
- (11) 小嶋菜温子氏・小峯和明氏・渡辺憲司氏編『源氏物語と江戸文化』(森話社 二〇〇八) など参照。
- (12) 稲本万里子氏「パーク財団蔵『源氏物語絵巻』賢木巻」(前掲注〔11〕所収) 参照。
- (13) 拙稿「偽経・説話・物語草子—岩瀬文庫蔵『釈迦并観音縁起』絵巻をめぐる—」(『仏と女の室町 物語草子論』笠間書院 二〇〇八 初出二〇〇五)。なお、以下の考察については、拙稿「杉原盛安とその文化営為」(石川透氏監修/阿部泰郎氏・阿部美香氏編『岩瀬文庫蔵奈良絵本・絵巻解題図録』二〇〇七) をもとに、新たに知り得た情報を加えるなど、訂正・増補を施したものである。
- (14) 岡見正雄氏「説教と説話—建保四年写明尊草案集中の一説話の釈文—」(『国語国文』二六一—八 一九五五)。この他、徳田和夫氏「『月日の本地』の典拠 小考」(『神道大系八六』『中世神道物語』月報 一九八九)、牧野和夫氏「七寺蔵『大乘毘沙門功德経』と『因縁・説話』」(『七寺古逸經典研究叢書』四 一九九九)、箕浦尚美氏「金剛寺蔵(佚名孝養説話集抄)について」(平成十六—十八年度科学研究費補助金基礎研究(A)『金剛寺蔵一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』研究成果報告書第一分冊 二〇〇七) 参照。
- (15) 刈谷市立刈谷図書館蔵本(国文学研究資料館マイクロフィルム)による。
- (16) 東京国立博物館マイクロフィルムにより、私に翻字し、句読点を付した。
- (17) 国文学研究資料館マイクロフィルムにより、私に翻字した。
- (18) 佐々木孝浩氏の御教示による。斯道文庫古典叢刊之六『中世聖徳太子伝集成』第三巻仮名本(勉誠出版 二〇〇五) 参照。
- (19) 阿部美香氏の御教示による。榑笥節男氏『宮内庁書陵部 書庫涉獵—書写と装丁—』(おうふう 二〇〇六) 参照。
- (20) 池和田有紀氏の御教示による。『文明歌合』については、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期』(風間書房 一九八四) など参照。

- (21) 中世歌合研究会編『中世歌合伝本書目』(明治書院 二〇〇一) 参照。
- (22) 伊倉史人氏の御教示による。三重県立図書館第四八回地域ミニ展示「山名家と山名文庫―津に300年続いた学びの家系―」(二〇〇七・五) 参照。
- (23) 中川博夫氏の御教示による。内題「西行上人集」。近世前期の写しか。本文の系統などの詳細については、中川氏による御考察を待ちたい。
- (24) 伊倉史人氏の御教示による。武井和人氏「東山御文庫蔵『古今集釈義』攷―附翻刻・校異』(『研究と資料』四三二〇〇〇・七) など参照。

附記

本稿を成すにあたり、貴重な蔵書の閲覧を御許可頂いた各機関、並びに貴重な御教示を賜った諸氏に深謝申し上げます。なお、本稿は科学研究費補助金(二〇八二〇〇四六)による研究成果の一部である。